

あさ ひ
朝 日 遺 跡

調査の経過

本年度は朝日遺跡調査の最終年度である。調査区はA区・B区・D区で、面積2000㎡である。

3調査区はいずれも南微高地の居住域に位置し、濃密な遺構・遺物の検出が推定された。調査成果はその予想を裏切ることなく、銅鐸を筆頭にして遺構・遺物に新たな事実を書き加えることになった。(石黒立人)

調査の概要

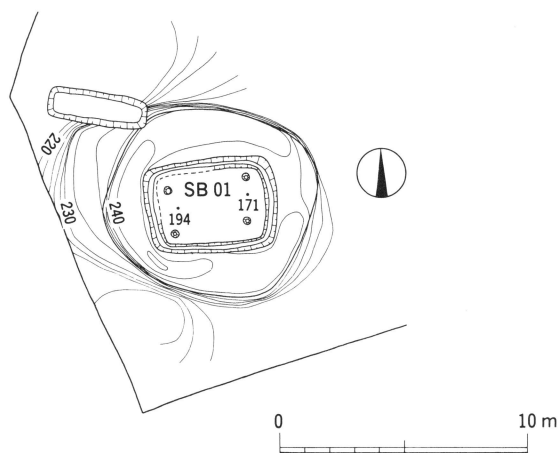
A区

A区は検見塚の南西に位置し、南居住域の中央部に当たる。基本層序は水田耕作土以下に灰色粘土、黒褐色砂質シルト、黄灰色シルトと堆積する。

黒褐色砂質シルト上面で、中世方形土坑7基、古墳時代前期の住居1軒などが検出された。このうち住居(SB01)は平面形が隅円長方形を呈し、周堤と考えられる高まりも良好な形で検出できた。昨年度調査された古墳時代の住居と合わせて、該期の集落の様子を



第Ⅰ図 調査区位置図



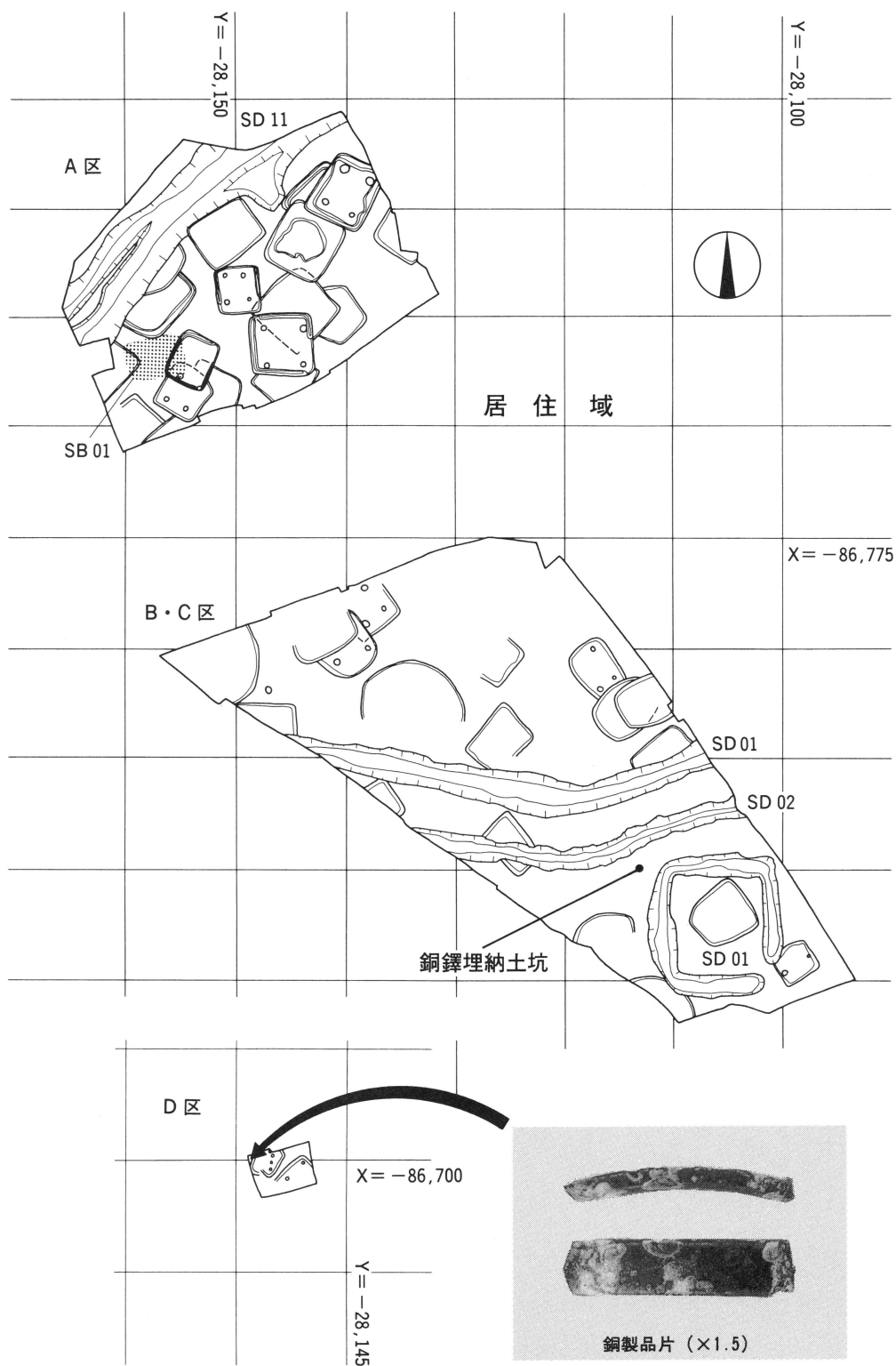
第2図 SB 01プラン（等高線は2 cm単位）

知る手掛かりとなろう。

黒褐色砂質シルト層は弥生時代各期の遺構による攪乱が著しいため、検出の容易な黄灰色シルト層上面で遺構を検出した。調査区の北では弥生時代中期の溝（SD11）が検出され、埋没する過程で再掘削されていることが確認できた。その他の遺構としては住居、土坑などがあり、住居跡は円形住居が1軒ある他は、いずれも隅円方形の平面形を持つ住居である。このうち隅円方形住居は、周溝の幅が広いものと、幅が狭いものに分けられ、前者は弥生時代後期、後者は弥生時代中期に属するものであろう。土坑は一般に炭化物、焼土が層状に堆積しているが、土器を多量に出土した弥生時代中期の例もある。（鈴木正貴）



第3図 A区全景



第4図 遺構配置図 (1/600)

B区

調査区は、南居住域の南部に位置し、上面では中世方形土坑、弥生後期の環濠・方形周溝墓・銅鐸埋納土坑、下面では多数の竪穴住居・土坑を検出した。

中世 中世方形土坑は、長軸を東西に向けたものが南北に向けたものに囲まれる配置をしていた。土坑の堆積状況は、土層セクションが斑状をなすもの、斑状部分が下部に限定され上部は灰色粘土の自然堆積がみられるもの、の二つに分れ、後者は長軸が南北方向にあるものに限定されている。土坑内部からの遺物の検出は、前者のうち長軸が東西方向にあるものからは灰釉系陶器と小皿のセットが、後者からは自然堆積層中からヒシの実が出土した。時期は14世紀後半である。

弥生後期 環濠2条と方形周溝墓1基、銅鐸および埋納土坑を検出した。環濠のS D01は下層が山中期、上層は欠山期である。S D02は山中期であるから、本調査区に限定されるが、環濠は山中期2条欠山期1条ということになる。S Z01は山中期の築造であるけれども、上層からは欠山期の土器が出土している。

銅鐸埋納土坑は、長軸がほぼ東西になる64×22cmの長楕円形プランで、断面はU字形を呈し深さは25cmを測るが、銅鐸そのものは底から5cmほど浮いて出土した。埋土はまわりの包含層とほとんど同じ漆黒色を呈する砂質シルトで、土坑底から5cmは銅鐸をうまくねかせるために詰めたものと考えられる。銅鐸の内部にも同様の土が詰められ、掘り込まれている包含層と同じ時期の土器片が含まれていた。 (石黒立人)

出土銅鐸について

(現状) 銅鐸の現状は、片側の鰭・A面の身の一部・B面の身の1/4が欠損し、B面の右半分が内側に湾曲して数片に割れてしまっている。このうち鰭の欠損と身の湾曲は埋納後の掘削による打撃のため生じたものであるが、破面の観察によるとごく最近におこったものではないと考えられる。出土時には埋納坑内の埋土がほぼ全面に付着していたためクリーニングを行ったが、土の除去とともに文様や外壁が剥がれ落ちるため、クリーニング部分は最小限にとどめた。特に、A面の左側とB面全体にわたっては、薄くではあるが埋土が強固に付着しており、今後さらに微細な除去作業が必要かと思われる。

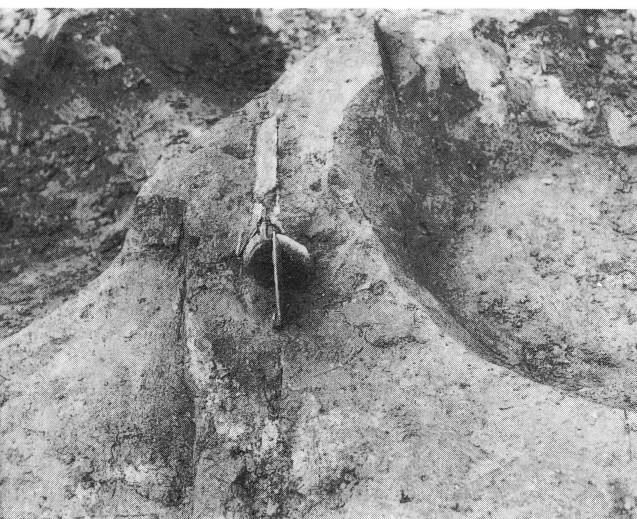
(大きさ) 銅鐸の大きさは、鐸高46.3cm、身高33.2cm・幅(現状26.3cm)・底部長径(現状23.4cm)・底部短径16.2cm、鈕高13.1cm、鈕孔高3.5cm・幅3.8cm、舞長径(現状15.0cm)・短径11.6cm、鰭最下部幅2.9cmを測る。

(各部の特徴) 鈕は、外縁二区・菱環・内縁の四区に分かれる。外縁には相対する鋸歯文が配されており、それぞれ鋸歯文内には平行斜線が交互につけられている。ただし現状で確認できるもののうち、A面の内向する鋸歯文帯の右から4番目と5番目の平行斜線は



▲上段 西から見た銅鐸埋納坑付近

▲下段 北から見た銅鐸埋納坑付近



▲銅鐸検出直後（西から）



▲クリーニング後の銅鐸



埋納坑を部分的に掘り下げた状態▶

同方向に走っている。また、A面の右最下位の外・内向の両鋸歯文は通常の半単位となっている。菱環は、外縁と内縁の境にやや厚い突線を配すことによって上下に区切られ、3本1単位の突線5組によって四分割されており、各区画ごとに異方向の綾杉文がなされている。

舞には2個の円形の舞孔があり、中央部に紐脚壁がみられる。

緒は、上端4本・下端3本の突線によってくぎられ、双耳の飾耳が上端に付く。内側には内向の鋸歯文が施され、鋸歯文内には平行斜線が交互の方向につけられている。ただこの平行斜線も鈕の場合と同様に、最下位のものから上に4番目と5番目、8番目と9番目のものが同方向に施されている。

身は、2本の突線（最下位のものは3本）によって区切られた縦帯3帯、横帯3帯によって四区に分けられ、さらにその下に下辺横帯がある。縦・横帯には斜格子文、下辺横帯には異方向の平行斜線をもつ上向きの鋸歯文がつけられている。縦・横帯のうち、上下のものは横帯が縦帯を切っているが、中央のものは斜格子そのものには切り合いはなく、縦帯と横帯の交差する区画、それに隣接する上下左右の区画それぞれに斜格子の方向が異なっている。形持孔は、上位の区画に2ヶ所、下端に2ヶ所みられる。身には所々に鑄造時の湯廻りが悪くて生じたと思われる文様の不鮮明な部分が見られ、特に下位の1／3程には巣が多く発生している。

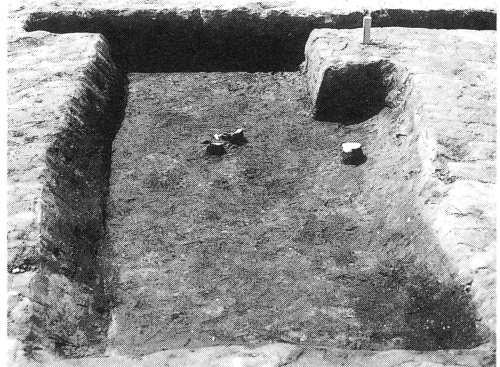
内面には、下位3cm程のところに1条の内面突帯が巡り、真土かと思われる白い細粒の砂が部分的に固着していた。 (宮腰健司)

弥生中期 円形竪穴住居跡2の他は隈円長方形住居を多数検出した。調査区南部で検出した住居の埋土は、A区の住居と異なり黄灰色シルトブロックの整地層は確認できなかった。居住域の中心部と外縁部では集落景観にも差があるようである。今後詳しく検討する必要がある。

D区

検見塚の北西に位置する調査区である。上面では検見塚の周溝、下面では住居跡の一部を検出した。弥生後期の包含層からは銅製品の破片が出土した。

(石黒立人)



B区 中世土坑と灰釉系陶器